



知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家 末崎 孝幸

末崎 孝幸氏

1945 年生まれ。1968 年一橋大学商学部卒業、同年日興証券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員(調査本部長)を務める。2004 年に退職。Facebook 上での氏のトリビア投稿は好評を博している。



タイトー(社名の由来と創業者コーガン)

1. (株)タイトーは、現在スクウェア・エニックスの完全子会社となっているが、14 年前の平成 18 年(2006)3 月まで東証1部上場会社だった。前身は昭和 25 年(1950)ユダヤ人のミハエル・コーガンが設立した「太東洋行」である。「太東」とは「極東の猶太(ユダヤ)人会社」を意味している。

この会社は 40 年ほど前にインベーダー・ゲームで一世を風靡、50 数年前には「オリンピックゲーム」(パチスロの原型ゲーム機)、クレーンゲームなどのヒット商品を出している。コーガンは日本でのゲーム機の普及に貢献したのち昭和 59 年(1984)死去(享年 64)。

2. 創業者のコーガンは昭和 13 年のオトポール事件で多くのユダヤ人保護に尽力した樋口季一郎中将、安江仙弘(のりひろ)大佐と親交があった。戦後、安江大佐はソ連に拘束され、昭和 25 年にハバロフスク収容所で病死した(享年 62)。その後、葬儀が挙げられていないことを知ったコーガンは在満時代にユダヤ人保護に奔走していた安江に深い恩義を感じていたため、昭和 29 年失意の生活を強いられていた安江の遺族に「在日ユダヤ協会で一切の費用を持つから好きなようにやってください」と申し出ている。

(追記)

- ① 安江大佐に感銘を受け、親日家になったコーガンは昭和 14 年に来日し、「早稲田経済学院」で貿易実業を学んだ。滞在中、ロシア文学者の米川正夫氏の家を下宿し、彼のドストエフスキーの翻訳を手伝っている。彼は流暢な日本語を話しながら「安江さんに助けられたユダヤ人の数は 5 万人に上る」と語っている。(オトポール事件で樋口、安江らが保護したユダヤ人は



長期投資仲間通信「インベストライフ」

数千から3万人といわれ正確な人数は不明。コーガンが5万人と言ったのは助けられたユダヤ人とその後の子供や孫などを含む数字と思われる)

- ② イスラエルの首都エルサレムの丘に本を広げた形の黄金の碑が立っている。ゴールデンブックと呼ばれるもので、ユダヤ民族のために貢献した人を永久に讃えるために、と世界各国のユダヤ人が金貨や指輪などを持ち寄って鑄造したものである。この黄金の碑にメンデルスゾーン、アインシュタインらとともに、樋口季一郎、杉原千畝、安江仙弘の名が刻印されている。

「ガラスのうさぎ」の像（の由来）

JR 東海道線二宮駅南口（神奈川県中郡二宮町）に「ガラスのうさぎ」の像が立っている。「ガラスのうさぎ」は児童文学作家・高木敏子によるノンフィクションの文学作品。

大東亜戦争末期の昭和20年8月5日、二宮駅周辺は米軍機の機銃掃射を受け、少なからぬ犠牲者がでた。その時、目の前で、ガラス工芸品の工場を営んでいた父を失った13歳の少女（高木敏子）が、戦後の厳しい環境下でけなげに生き抜く姿を描いたのが「ガラスのうさぎ」であり、多くの国民に深い感動を与えたのである。そして二宮町民が高木敏子の体験、平和の尊さを後世に伝えるためにこの像を建立した（建立年・昭和56年8月5日）。少女が胸に抱えているのは、父親の形見となった「ガラスのうさぎ」である。



大東亜戦争末期の昭和20年8月5日、二宮駅周辺は米軍機の機銃掃射を受け、少なからぬ犠牲者がでた。その時、目の前で、ガラス工芸品の工場を営んでいた父を失った13歳の少女（高木敏子）が、戦後の厳しい環境下でけなげに生き抜く姿を描いたのが「ガラスのうさぎ」であり、多くの国民に深い感動を与えたのである。そして二宮町民が高木敏子の体験、平和の尊さを後世に伝えるためにこの像を建立した（建立年・昭和56年8月5日）。少女が胸に抱えているのは、父親の形見となった「ガラスのうさぎ」である。

ミーハー（の語源）

世の中の流行に流されやすい人や芸能人の動静などを知ったかぶりする人のことを「ミーハー」という。低俗な趣味や流行に夢中になる教養の低い人に対する蔑称のような意味があるためか、最近あまり聞かれなくなっている。

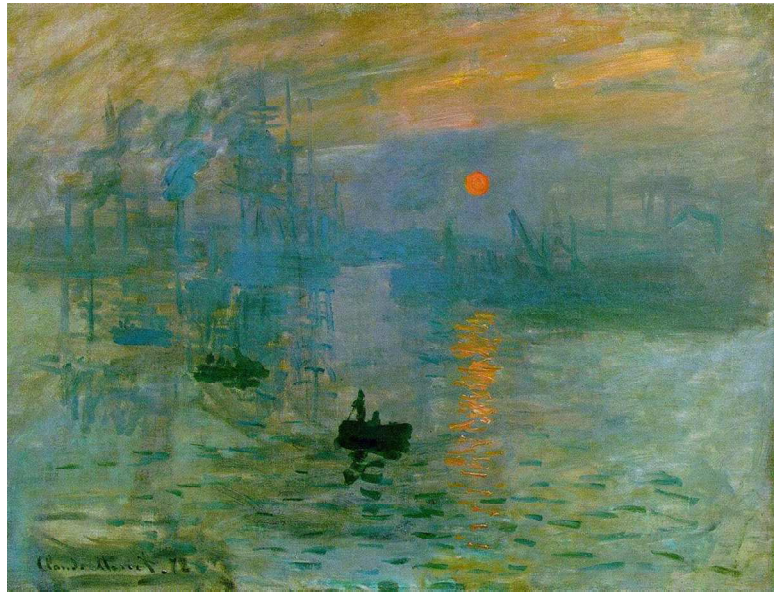
実はこの言葉、昭和2年に公開された松竹映画「稚児の剣法」（サイレント映画）で林長二郎（のちの長谷川一夫）のファンのために作られた言葉である。美貌の俳優・林長二郎は若い女性に大人気となり、彼女たちが好きな「みつまめ」と「はやし長二郎大好き人間の「み」と「は」を繋げてできたのが「ミーハー」というキャッチコピーだったのである。



印象派(の由来)

「印象派」はもともとクロード・モネが属していた画家たちの集団の名前だが、印象派という言葉はモネの初期の作品「印象・日の出」に由来している。この作品は1874年の展覧会に出品された。ル・アーブル(フランス北西部の港湾都市)を描いた「印象・日の出」は当時「印象を描いただけ」という厳しい非難を浴びたという。

当時は写実的な絵画が理想とされ、テーマも神話や歴史、聖書などから選ばれていた。一方、モネの絵は輪郭がはっきりせず、光景もぼんやりと描かれており、当時の主流からは外れていた。



しかし、現代の評価はまったく逆。印象派の絵は欧米だけでなく、日本でも高く評価されるようになってきている。

チャップリンのマネージャーは日本人

イギリス出身のチャーリー・チャップリンは俳優、映画監督、コメディアンのほか、脚本家、作曲家と多方面で活躍した「喜劇王」だが、大の日本びいきだったことでも知られる。チャップリンが運転手を募集したところ、当時留学生だった高野虎市氏が応募、即採用となった。その後彼の誠実な仕事振りが認められ、マネージャーへと昇格した。結局、1916(大正5年)～1934(昭和9年)年まで運転手、マネージャーとして18年間勤めた。

(追記)チャップリンは1932(昭和7)年「五・一五事件」の前日に来日、翌15日に犬養毅首相と約束をしていたが、チャップリンは「相撲を見に行きたい」と言い出し、高野氏が首相の歓迎会をキャンセル、結果として難を逃れた。

この件に関して、犬養毅の孫である安藤和津氏は「チャップリンが、なぜか天ぷらが食べたいと言ったので、父(犬養毅の三男)が天ぷら屋さんにお連れしたのです。で、チャップリンは官邸にいなかった」。そんなたまたまの状況下で事件が起き、「チャップリンも一緒に暗殺する計画があつて。将校が踏み込んで祖父だけが暗殺されたのですけれども」とテレビで話したことがある。